

熊谷市域における神輿の建築史的研究

—地域性と大工技術に着目して—

建築学専攻
建築史研究

MJ21115 松下 裕介

指導教員 岡崎 瑠美・小柏 典華

1. はじめに

令和3(2021)年度から令和4(2022)年度にかけて、個人蔵文書の調査を行い、近世以降に記録された大工文書や絵図類を閲覧する機会を得た^{注1)}。一連の史料群には、住宅・社寺建築の建て方に関する技術書だけでなく、神輿等の祭礼に関する史料が多く含まれていた。一般的に神輿の作り手として大工が関わることが多く、意匠的な形態は神社本殿との共通点が見出せる^{注2)}。しかし、神輿は美術工芸品として文化財評価がされていることから、建築と定義できない。

先行研究によると、神輿の形状は大きく関西型と関東型の2種に大別され、蕨手の位置や棧唐戸と羽目板の選択、囲垣、組物の形式等に違いが見られる^{注3)}。しかし、建築の専門家から神輿の形状や地域性、大工との関係について述べたものは少ない。

本研究では、名所図会、浮世絵といった絵画史料、大工家に伝わる技術書、現存する神輿の実測調査から得られた知見を総体的に通覧することで、神輿の地域性を明らかにする。また、神輿製作と大工家との関わりや、大工技術の転用について検討する。

2. 個人蔵文書の神輿史料

2.1 神輿史料の概要

文書の全数調査より、約 2100 点の史料が確認された。その中で神輿絵図が 9 点、「神輿」とある茶封筒が 3 点、神輿の項がある雛形本が 1 点、その他、写真や祭りの冊子が見つかった(表 1)。この内、「大杉神輿之図」、「神輿之図」の 2 点は、端書等から葛和田大杉神社(熊谷市)と推定した^{注4)}。本稿では、現存する神輿の確認もできた大杉神社について報告する。

2.2 「大杉神輿之図」

本図は、昭和6年に清水徳司氏によって描かれた神輿の正面図である(図1)^{注5)}。絵図は土台台輪とその廻り、胴部、組物、屋根から構成される^{注6)}。胴部は柱間1間、正面棧唐戸付き、屋根は照り起りのある宝形造である。本図の特徴として、絵図左側にのみ、修正前後と思われる2種類の軒先と野筋、蕨手がある。右側の軒先には立面図に重ねて、地垂木と木負、飛檐垂木の断面線がある。隅木には支柱が立ち、左側は軒先2種類に合わせて2本ある。また各部に、金物や彫刻表現が見られる。

2.3 「神輿之図」(「大杉大神仕事図」)

本図は、神輿の土台台輪の上端から屋根軒面までを墨線で描く(図2)^{注7)}。

図像は、土台台輪に乗る囲垣と鳥居、柱間1間、正面棧唐戸付きの胴部、組物から構成される。特徴は、右側にのみ囲垣親柱に擬宝珠が乗る点、隅木を支柱が支える点である。なお、肘木の一部の線は途切れ、図像が省略されている。また「大杉神輿之図」と異なり、本図からは金物や彫刻表現といった細部意匠は見られない。

3. 葛和田大杉神社の神輿調査

葛和田大杉神社の神輿実測調査及び写真史料から、史料の立面図から分からない胴内部の状況を確認できた^{注8)}。調査時に正面棧唐戸内を確認した所、中心部に御神体を納める木箱が入っていた^{注9)}。

一般的に神輿胴内は、心柱が土台台輪から直接屋根を支える構造をとるが、大杉神輿は心柱を用いず、隅の4本の胴柱が隅木を支え屋根を乗せる構造をとる。更に、屋根架構が乗る隅木が胴柱に固定されない特殊な構法である(図4)。その他、構造補強として胴柱柱頭の帯鉄補強や、胴柱間の貫や斜材を用いた振れ止め、隅木の下垂防止の支柱が施されている。

また、外観は「見せかけの」意匠表現が用いられていた。胴柱や長押、組物等からなる外部の部材は、構造体の胴柱や屋根架構とは切り離されており、全て修飾的表現であることが明らかとなった。

以上より内部の構造体が、揺らぎを前提として神輿全体を支えていることが分かった。更に、貼付意匠で自由な表現が可能な中、神社本殿と共通する意匠を導入する点に、大工技術の転用が見出せる。

4. 葛和田大杉神社神輿と史料の対象

4.1 個人蔵文書との比較

現存する神輿と各史料を比べると、その彫刻表現等に多少の違いはあるが、形状に大きな差はなかった。また「大杉神輿之図」は軒廻りを中心に修正線が多く、修理現場で実際に使用された可能性が高い^{注10)}。

表 1 文書の神輿絵図一覧

絵図名	特徴
1 「神輿之図」	立面、墨線、スケールなし
2 「大杉神輿之図」	立面、墨と朱線、縮尺2分の1
3 「御神輿之図」	立面、墨線、スケールなし、軸装済み
4 元治2年神輿の絵図	立面、墨線、スケールなし、寸法あり
5 康徳7年「神輿之圖」	立面、着彩、縮尺5分の1
6 「二手先神輿現寸図」	立面、墨線、原寸
7 明治35年神輿の絵図	立面、墨線、スケールなし
8 大正6年神輿の絵図	立面、墨線、スケールなし
9 「神輿圖 巴」	立面、着彩、スケールなし

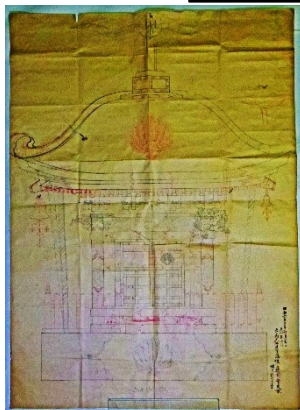


図 1 「大杉神輿之図」

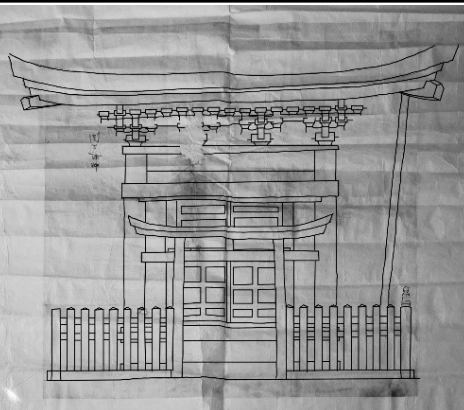


図 2 「神輿之図」(筆者加筆)

4.2 雛形本との比較

続いて近世の雛形本と比較することで、大杉神輿の設計手法の理解を図る。本稿では、大杉神輿と、文書に収蔵される『新撰雛形一、宮形』の神輿の項に記載の寸法や絵図との比較を行った^{注11)}。

まず、大杉神輿と雛形本の絵図を見比べると、屋根の高さが低く、幅が広いことが分かる(図3・5)。また、土台台輪の幅や柱間に対して胴部の高さが低く、雛形本の神輿が細く見えるほど、大杉神輿はどっしりとした印象を受ける。続いて個々の部材を比較すると、大杉神輿の方が大きく、その差は表2のようになる。特に、各長押や頭貫せいは2倍以上大きい^{注12)}。一方で縦材である胴柱と、腰長押から上長押の内法寸法が1.5倍を切っている。また、屋根勾配は約3.5°と緩やかである。これら縦横の比率の差が、神輿の印象の差を裏付けていると考える。以上のような、流通本である雛形本と、大杉神社神輿の差異は、熊谷市内の神輿製作における地域性の一端であると考えられる。

表 2 雛形本に対する大杉神輿の部材の大きさ

部分	倍率	台輪せい	
胴柱幅	1.46	腰長押～上長押内法	1.39
地覆長押せい	2.03	地覆長押～腰長押内法	2.26
頭貫せい	3.42	腰長押、上長押せい	2.37

5. 神輿の地域性

以上の地域性に対する考察から、全国の神輿の悉皆調査を目的として、名所図会や浮世絵の通覧を行った^{注13)}。これら絵図は神輿が主として描かれた一部浮世絵を除き、祭礼等の風景に神輿が描かれているものが多かった。調査の結果、神輿絵図は抽象的な表現にとどまり、詳細な形状比較や地域性を考察するには至らなかった。一方で、胴と屋根、屋根上の装飾は多くの絵図で確認でき、神輿の印象を決定づける重要な要素であると考えられる。

浮世絵等の調査を踏まえ、大杉神社を含めた熊谷市内の神輿の地域性を検討するため、熊谷市内の全神社を訪れ、神輿の特徴を調査した^{注14)}。調査の結果、神社23社と聖天山歓喜院から37基の神輿を確認した。

個々の神輿を分析すると、32基中27基で土台台輪から隅木に伸びる支柱があり、大杉神輿のように構造的役割が伺えるもの、明らかに意匠的なものに大別できた。なお、前述の名所図会や浮世絵、各種文献の神輿にはあまり支柱は確認できず、熊谷市域における神輿の形状的地域性であると考えられる。

6. 結論

大工家所蔵の神輿史料と神輿の実測調査により、大工が神輿製作を担ったことが改めて裏付けられた。また現物神輿の分析により、外観の意匠と切り離された内部構造が揺らぎのある神輿全体を支えていることが分かった。更に外観として神社本殿に共通する意匠を選択する点で、大工技術の転用が見出せた。

加えて、名所図会や浮世絵の分析と、大杉神社を含めた熊谷市内の神輿の比較を行った。名所図会等の絵図には表れなかった地域性が、設計での部材寸法の決定や、形状的な視点から明らかになった。

大杉神輿も然り、神輿とそれが中心の祭は、地域の人々に愛され、継承されてきた。今後神輿を評価する際、全体を支える構造部と外見を構成する意匠部に分けることで、建築史的研究への発展可能性がある。

注1: 文書を所蔵する家は、埼玉県熊谷市に居住する大工の家系である。

注2: 神輿製作は、仏具師や家具職人、宮大工、神輿師など時代や地域によって様々な職人が担ってきた。特に近世まで神輿製作を手掛けていたのは仏具師や家具職人である。現在、東京周辺では神輿製作所が中心に担っているが、建築の造営には関わっていない。

注3: 監物恒夫『神輿(1)』(刊々堂出版社、1982年) 同氏『神輿(2)』(刊々堂出版社、1983年)、手中正『宮大工の技術と伝統 神輿と明王太郎』(東京美術、1996年)を参考。

注4: 埼玉県熊谷市に所在する大杉神社は葛田大杉神社のみである。

注5: 「昭和六年午六月吉日 武州妻沼住 平内大隅流堂宮師清水徳司金友画 縮尺貳分之壹」とあり、作者、年代、縮尺が分かる。

注6: 一般的に、神輿の土台となる基部を台輪と呼ぶ。本稿では建築の一般的な台輪と区別し、土台にあたる台輪を土台台輪と定義する。

注7: 絵図本紙は白い台紙に貼り付けられ、左上に「神輿之図」の裏書が読み取れる。また本図を包む新聞紙には、「大杉大神仕事図」の記述がある。本図の線は非常に薄く、写真では見えにくいので、筆者が線をなぞったものを図2で示している。

注8: 大杉神社には大小2基の神輿が存在する。本稿では形状の明らかな違いから、大神輿を検討対象とする。関係者より提供頂いた修繕の記録写真には、胴内部や屋根の様子など、内部構造の分かる写真があった。他に、大杉神社にある神輿の修繕年表にない平成10年の修繕記録が入っていた。加えて明治から平成にかけての札や銘の写真があり、大工や職人が明記されていた。

注9: 一般的な神輿では心柱を御神木と見立て、神様を祀る。

注10: 「大杉神輿之図」は、同じ木箱から見つかった「大杉神社 御神輿図」「清水徳司金友画」とある封筒に入っていたと思われる。よって本図は、清水徳司氏が修繕の際に利用したと考えられる。

注11: 雛形本は「日本建築学会図書館デジタルアーカイブス」を参考。

注12: 横材である台輪は1.73倍と2倍を切るが、1.5倍よりは大きく、台輪せいは長押せいの半分程度であるため、影響は軽微と見た。

注13: 名所図会は国立国会図書館の「名所図会」検索結果1879件、名勝図会とは同「名勝図会」376件、浮世絵は「ARC浮世絵データベース」の「神輿」139件、同「祭」1692件を対象とした。

注14: 日本の神社・寺院検索サイト「八百万の神」の神社、Googleマップ等を参考とし、対象109社を選定した。また聖天山歓喜院は、関係者の助言によって事前に神輿の存在が明らかであった。



図3 大杉神社神輿 (2022. 6. 25 撮影)



図4 神輿の柱廻り (筆者加筆)



図5 雛形本の神輿絵図 (筆者編集)